バウハウス100年

田中 辰明
TATSUAKI TANAKA
（お茶の水女子大学 名誉教授）

はじめに

バウハウスは今年2019年に創立100周年を迎える。ドイツが第一次世界大戦で敗戦した結果生まれたのがヴァイマール共和国である。この共和国は1919年から1933年までの僅か14年間という短い生涯であった。バウハウスの誕生，消滅もこれと全く一致している。ヴァイマール共和国は極めて民主的な憲法を持っており，婦人にも参政権を与えた。この時代は後世になって「黄金の1920年代」ともいわれる。表現主義をうたい，大量生産による製品の一般市民への普及をめざしたバウハウスはヴァイマール共和国文化を象徴する存在であった。第一次世界大戦でドイツは突如敗戦に直面した。そして保守派，左派，中道が政権の獲得を狙った。中道の社会民主党（SPD）が機先を制して共和国宣言をあげ，ヴァイマール共和国の政治の中枢を担うようになる。したがって，バウハウスもこの社会主義的影響を受けている。しかし政権の基盤は極めて不安定で，政権は頻繁に交替するという事態になった。しかも天文学的数字のインフレが生じ失業者も多く，一般庶民の生活は極めて厳しいものであった。またこの時代に活躍したのが物理学者アインシュタインをはじめとするユダヤ系ドイツ人であった。

1．バウハウス

バウハウスの初代校長はヴァルター・グロピウス（1883～1969）で，3代目校長はミース・ファン・デル・ローエ（1886～1969）である。では間に入る2代目校長は誰かというと，ご存知の方はあまり多くないだろう。2代目校長はハンネス・マイヤー（1889～1981）である。

ヴァルター・グロピウスとミース・ファン・デル・ローエはあまりにも高名な建築家であるので，どうしてもハンネス・マイヤーの影が薄くなるのも致し方ない。グロピウスはバウハウス設立のマニュフェストに次のように述べている。「バウハウスはあらゆる芸術的創造を統合することをめざし，あらゆる工芸部門をひとつの新しい建築というものに，その建築の不可分な構成要素として総合していくことをめざす。バウハウスの究極の目的とは，たとえばそれがはるかな目標であろうと，ひとつの統合芸術，すなわちモニュメンタルな芸術とデコラティブな芸術のあいだにまったく境界が存在しない一つの偉大な建築である」。バウハウスの究極の目的は芸術的創造を統合して建築を作る事であった。この「バウハウス宣言にはライオネル・ファイニンガーによる大聖堂の木版画が表紙を飾っている（**図-1**）。ここの塔の先端には絵画，彫刻，建築の3つの芸術を示す星があり，光が交錯している。バウハウスは国立の総合芸術学校であった。当時大学で学ぶ女性は極めて稀であったが，民主的なヴァイマール憲法が制定された時にヴァイマールで発足したバウハウスには多くの女性の応募者があった。校長グロピウスは驚いたが，入学を許可せざるを得なかった。バウハウスで手に職を覚えた女性はその技術で社会進出を果たすことができた。なかにはバウハウスの教員になった女性もいる。オスカー・シュレンマーが1932年に画いた「バウハウスの階段」（**図-2**）は女性の社会進出を描いたものである。

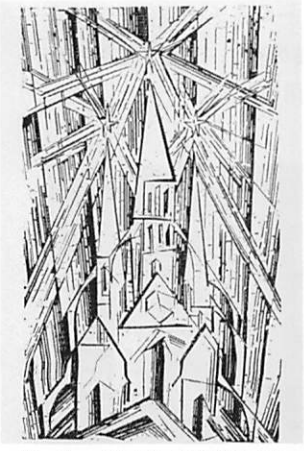

図-1　バウハウス宣言の表紙（ライオネル・ファイニンガー作）

図-2　バウハウスの階段（オスカー・シュレンマー作）

2. バウハウスの教授陣

バウハウスの実績として素晴らしい絵画を残したパウル・クレー，ヴァシリー・カンディンスキー，オスカー・シュレンマー，ライオネル・ファイニンガー，ヨーゼフ・アルバースらの業績は高く評価される。また芸術教育に力を入れたヨハネス・イッテンの業績も高評である。イッテンは絵画の授業をする前に学生に体操をさせるなど，独特な教育法に様々な逸話が残っている（**写真-1**）。ラスロ・モホリ＝ナギのグラフィックデザイン，写真，マリアンネ・ブラントの金属加工，グンタ・シュテルツルの織物も後世に大きな影響を与えた。マルセル・ブロイヤーのパイプ椅子も良い評判を得た（**図-3**）。ではグロピウスが究極の目的とした建築はどうか？　知られている作品はベルリンのヴァルター・グロピウス，アドルフ・マイヤー共作のゾンマーフェルト邸があるが，第二次世界大戦で焼失している。ヴァイマールに残る，ゲオルグ・ムッヘ，アドルフ・マイヤーの「アム・ホルンのモデル住宅」，グロピウスによるデッサウのバウハウス館（**写真-2**），マイスター宿舎（**写真-3**），デッサウ・テルテンの住宅団地（**写真-4**），カール・フィガーによるコルンハウス（**写真-5**），そしてハンネス・マイヤーのベルナ

写真-1　ヨハネス・イッテンの授業前の体操

図-3　マルセル・ブロイヤーのスチールパイプ椅子
（デッサウに自転車工場があり，ここで生産されたスチールパイプを使用した。）

写真-2　グロピウス設計によるデッサウのバウハウス館

写真-3　グロピウス設計によるデッサウのバウハウス教師館
（この建物でカンディンスキーとクレーが共に生活をしていた）

写真-4　デッサウ・テルテンの集合住宅

写真-5　デッサウのコルンハウス

ウの同盟研修学校（**写真-6**，**写真-7**）くらいである。究極の目的が建築であったにしては作品数は多くない。

建築を目指して基礎となる絵画，彫刻，グラフィックデザインに力を入れているうちに，台頭してきたナチスに押し倒されてしまったというのが実情であろう。ドイツでは押し倒されたが，ミース・ファン・デル・ローエはシカゴへ亡命し，現在のイリノイ工科大学建築学部長に就任する。ヴァルター・グロピウスも米国亡命後ハーバード大学で建築学科教授として活躍した。そしてバウハウスのマイスターであったマルセル・ブロイヤーと共に事務所を立ち上げ，建築家として超高層建築を作り，成功した。カンディンスキーはパリで，パウル・クレーはスイスのベルンで画家として活躍した。ヨーゼフ・アルバースはブラック・マウンテン・カレッジで教鞭をとった。ラスロ・モホリ＝ナギはシカゴにニューバウハウス（New Bauhaus）を設立した。ハンネス・マイヤーはモスクワの大学教授になった。ナチスはバウハウスという組織を解体しても，そこに生まれた思想までも解体することは出来なかった。むしろ思想は世界各地に飛び，その地で花を開いたのである。

我が国にも吉田鐵郎による東京中央郵便局などバウハウスの影響を受けた建物が残る。ヨハネス・イッテンは自らの芸術学校をベルリンに作り，そこで学んだ山室光子，今井（笹川）和子らは自由学園工芸研究所を立ち上げた。

3．ナチスに協力したバウハウス関係者

ナチスの弾圧を受け，海外に逃亡したバウハウス関係者は多いが，逃亡しなかった人も多い。例えば，フランツ・エーリッヒ（Franz Ehrlich，1907-1984）はユダヤ系であったために強制収容所に収容された。現在はヴァイマール市に統合されたが，当時は隣接した町，ブッヘンヴァルト（Buchenwald）の強制収容所であった。エーリッヒはバウハウスで学んだことを名乗り出，強制収容所の建築関係の仕事に協力するようになる。バウハウスではグラフィックデザインを専門とするヘルベルト・バイヤーがレタリングを得意としていた。バイヤーは万国共通で使用できるように文字の幅は一定な，分かりやすい文字を開発し，1926年にポスターを発表した（**図-4**）。そしてこれがバウハウスの統一した書体となった。ブッヘンヴァルトの強制収容所の門扉はエーリッヒによるものであるが，このバウハウスの書体で“Jedem das Seine”（それぞれに見合ったものを）と書かれている（**写真-8**）。氏は他の強制収容所の門扉もデザインしている。多くは“Arbeit macht Frei”（労働は自由をもたらす）と書かれている。ザクセンハウゼン（Sachsenhausen）収

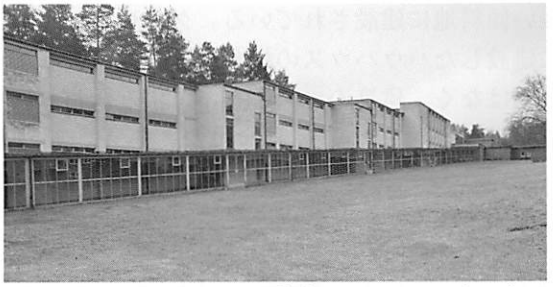

写真-6　ハンネス・マイヤー設計によるベルナウの全ドイツ労働組合総同盟の研修学校

図-4　バウハウスのレタリング（ヘルベルト・バイヤー作）

写真-7　全ドイツ労働組合総同盟の研修学校の片廊下

写真-8　フランツ・エーリッヒによるバウハウスの書体で描かれたブッヘンヴァルト強制収容所の門扉

写真-9　フランツ・エーリッヒによるバウハウスの書体で描かれたザクセンハウゼン強制収容所の門扉

容所の例を**写真-9**に示す。このようにナチスに協力したバウハウス関係者もいたが，こうすることで，生きのびることが出来，解放後はエーリッヒは旧東独の建築家としてすぐれた作品を残すことができた。

4．バウハウス2代目校長ハンネス・マイヤー

前述のようにハンネス・マイヤーは我が国ではあまり知られていない。スイスのバーセルで1889年に生を受けている。父親も建築家でエミール・マイヤー・リザと言った。バーゼルはスイスの3つ目に大きな都市で，ドイツ語，イタリア語，フランス語が話され，国際都市であった。このことがハンネス・マイヤーが後に国際的に活躍することに影響する。1905年に左官の技術を学び，その後建設の会社に勤務，さらにバーセルの工芸学校（Kunstgewerbeschule）で学習した。1909年から1912年までアルバート・フレーリッヒ（Albert Froelich）の建築設計事務所さらにベルリンのエミール・シャウト（Emil Schaudt）の事務所に勤務した。1912年から1913年にかけて英国に留学している。帰国後1916年にはゲオルク・メッテンドルフ（Georg Metyendorf）のミュンヘン・アトリエ（Münchener Atelier）の事務所責任者になっている。さらに1918年までエッセンの大鉄鋼所クルップ社の建設部管理部長を務めた。1919年から故郷バーゼルで建築家として自立した。1919年から1924年にかけバーゼル近郊のフライドルフ（Freidorf）に住宅団地（ジードルング"Siedlung"）を建設した。1924年にはベルギーに滞在している。1926年にハンス・ヴィトヴァー（Hans Wittwer）と共に建築事務所を設立している。そしてヴィトヴァーと共にバーゼルのペータース学校（Petersschule）を1926年に設計し，さらに1926年から27年にかけて国際連盟の本部を設計している。1927年4月にグロピウスから招聘を受けデッサウのバウハウス建築部のマイスターに就任している。1928年3月にはグロピウスの後任としてバウハウス校長に就任した。その時にかって共同で建築設計事務所を開設したヴィトヴァーをバウハウスに招へいしている。ヴィトヴァーと共にベルリンの北部郊外にあるベルナウ（Bernau）に全ドイツ労働組合総同盟の研修学校を1928年から1930年の間に建設した。マイヤーはバウハウス校長として綿密な教育プログラムを作成し，建築教育に力を入れた。しかし学生の中に共産主義者がおり，バウハウス内部でその勢力を伸ばすようになった。マイヤー自身も共産主義者であったことからデッサウ市と摩擦が生じるようになった。当時のバウハウスはデッサウ市立であったことから右翼系の新聞は「デッサウの税金がバウハウスを通じて共産党に流れている」と書き立てた。そのような政治的理由でマイヤーは1930年に解任され，モスクワの建築学校であるWASI大学の招聘を受けモスクワへ移住する。1934年から建築アカデミーの住宅局長を務めている。1936年から1939年までスイスでミューリシヴィル（Mümliswil）の保育園を設計している。1939年から1949年までメキシコに渡り，建築家，都市計画家として活躍した。出版社の社長も務めた。1949年スイスに帰国し1954年にルガーノ郊外のクロチフィッソ・デイ・サヴォサ（Crocifisso di Savosa/Lugano）という小さな村で死去した。マイヤーは1920年代の最も優れた機能主義者の一人に数えられている。氏の代表作はベルリンの北部にあるベルナウのドイツ労働組合総同盟の研修学校である。バウハウスが求めた良いプロポーション，実用的で簡素な事，手工業と芸術の統合を主張し，この結晶がベルナウの地に完成した。校舎は緩い傾斜地に建設されている。グロピウスがデッサウに建設したバウハウスの校舎や教師館のような矩形建築ではなく，建築のマスが互いに組み合わされ，そして貫通しあっている。校舎はなだらかな傾斜地を這っているように建っている。一部は宙に浮かんでいる。部分と部分が張り合い，建築の形態の妙を表現している（写真-6）。

建物に沿って片廊下がある（写真-7）。この廊下は地形に従い傾斜している。外気に面してはガラスがはめ込まれているので，廊下部分は付設温室になる。廊下の屋根は鉄骨によって支えられている。ガラス窓の上部には自然換気用に窓の開閉装置が設置されている（**写真-10**）。手動によるものであるが，これはグロピウスがデッサウのバウハウス校舎に採用した開閉装置と酷似している。学生寮で使用されていた机と椅子が展示されている（**写真-11**）。この机はヴェラ・マイヤー・ヴァルデック（Vera Meyer-Waldeck）の作品である。使用しやすいように僅かな勾配が設けられている。眩しさを防ぐために机の表面は黒色のリノリウムが張られている。机の右に引き出しがあるが，これはA-4サイズのノートや紙が収まる大きさになっている。このような規格も当時のバウハウスが普及を

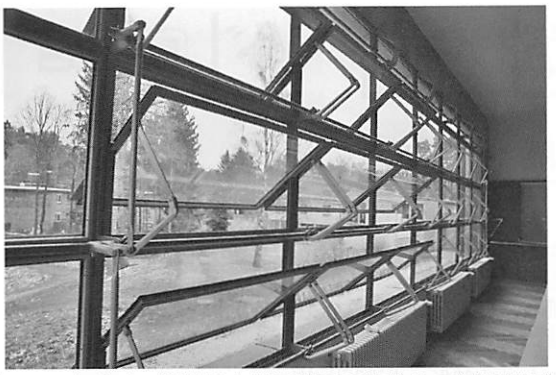

写真-10　全ドイツ労働組合総同盟の研修学校の自然換気装置

写真-12　ベルリン市に建つグロピウスシュタット

写真-11　全ドイツ労働組合総同盟の研修学校で学生が使用した机と椅子

写真-13　ベルリン市に建つミース・ファン・デル・ローエ設計による新国民美術館（Neue Nationalgalerie）

図ったものである。椅子は当時の会社トーネット（Thonet）が供給していたものである。

おわりに

バウハウス２代目校長ハンネス・マイヤーの代表作を紹介した。まさにバウハウス調の建築は評価されて良い作品である。しかしこの作品を含めてハンネス・マイヤーは日本では有名ではない。建築史の授業でも触れられていないであろう。

バウハウス初代校長グロピウスは世界から大芸術家をバウハウスに集め，芸術教育にあたらせた。これだけ個性的な芸術家を纏めて学校運営にあたったグロピウスの経営者的手腕は改めて評価されるものである。ベルリン出身であったグロピウスは氏の名前を冠した「グロピウスシュタット（Gropiusstadt）と呼ぶ大団地（ジードルング）がベルリン市ブコウ（Buckow）地区に1960年代に作られた（**写真-12**）。このことからもグロピウスはベルリン市民からも敬愛された建築家と言える。また３代目校長ミース・ファン・デル・ローエはベルリンに新国民美術館（Neue Nationalgalerie）を1965～68年にかけて建設した（**写真-13**）。

参考文献

1）田中辰明：「ブルーノ・タウト，日本美の再発見をした建築家」（中公新書2169）
2）田中辰明：「ブルーノ・タウトと建築・芸術・社会」，東海大学出版会
3）田中辰明：バウハウス（ヴァイマール時代）月刊建築仕上技術　2014年８月号
4）田中辰明：バウハウス（デッサウ）月刊建築仕上技術　2014年９月号
5）田中辰明：バウハウス（ベルリン）月刊建築仕上技術　2014年10月号
6）田中辰明：ベルリンに残るナチス好みの建築とナチスドイツへの反省，月刊建築仕上技術　2014年11月号
7）Magdalena Droste “Bauhaus” Taschen

（2019年１月31日　原稿受理）